

東日本大震災の翌年、福島県の外国人女性たちと出会い、支援を始める。京都・東京・仙台から駆け付けた支援者と地元市民、移住女性たちとともに「福島移住女性支援ネットワーク」(Empowerment of Immigrant Women Affiliated Network)を結成。中心メンバーは、30～50代の多国籍の女性たち。日本語教室やカラフル(多文化)フェスティバル、保養プログラムなどの諸経費は、海外や日本の教会とキリスト教学校からの献金によって支えられている。

## 外国にルーツをもつ移住女性と その子どもたちを輝かせたい

さとう のぶき  
福島移住女性支援ネットワーク代表 佐藤 信行

### 大震災下の外国人住民

2011年3月11日、東日本を襲った大地震と津波、そして福島第一原発の崩壊事故によって、住民は甚大な被害を受けた。災害救助法が適用された市・町・村に住んでいた外国人は、2011年3月末で111,672人に上った。

福島県・宮城県・岩手県に住む外国人の多くは、移住女性であった。彼女たちは1980年代後半以降、日本人男性との国際結婚で農村・漁村、中小都市部へ移住してきた中国人・韓国人・フィリピン人・タイ人女性たちである。彼女たちは日本に来て10年、あるいは20年以上になるが、日常会話ができて、日本語(特に漢字)の読み書きは困難なこともあり、また、防災にかかわる言葉を知らないこともあった。

例えば、震災前、移住女性の多くは、「ツナミ」という言葉を知っていたが、地震直後に「高台に逃げなさい」と呼びかけられても「タカダイ(高台)」という言葉が知らなかった移住女性は、石巻市(2012)や気仙沼市(2013)で実施した調査では39%にも上っていたことも明らかになっている。震災後には、地震と津波により、移住女性たちの水産加工場や水産物販売等の職場が奪われ、経済的支援、就労情報、日本語学習や就労のための学習の場も切迫した要求としてあった。

### 福島県下の移住女性たち

震災前は地域社会で周辺化され、不可視の存在であった移住女性たちであるが、震災をきっかけに、特に福島県では大きく転換していく。

震災直後、フィリピン人女性たちは福島市と白河市で、中国人女性たちは須賀川市といわき市、郡山市で、それぞれ自助組織を結成した。大震災と放射能汚染の過酷な状況の中で、子どもたちの健康を守るため、また家計を支えるために苦闘していた女性たちが結集したのである。

全国各地で多文化共生支援にかかわっていた支援者たちが被災地で彼女たちと出会い、震災の翌年(2012年)から当会を立ち上げ、彼女たちの就労支援と日本語学習支援、また彼女たちが自力で始めた子ども(父日本人/母中国人のダブルの子)の母語・継承語教育(異言語環境で親の言葉、文化を育てる教育)に対する支援から始めた。

2014年には、これら日本語教室(福島市・白河市)と継承語教室(須賀川市・いわき市・郡山市)を起点として、放射能被害に関する調査と情報提供、保養プログラム、「やさしい日本語」による防災ワークショップ、子どもフォーラム、地元市民との「カラフルフェスティバル」、相談・同行支援など、移住女性たちと協働して、さまざまなプログラムを



▲2019年12月14日、福島県・宮城県・山形県の7つの継承語教室（中国語／韓国語）の子どもたちが集まり、第4回ふくしま子ども多文化フォーラムを開催（福島県郡山市）。出演した子どもたち44人、お母さんたち53人、地元市民も含めて計200人が参加した。

実施し、また、移住女性たちのつくった自主グループを地域につなぐ取り組みも行ってきた。そんな中で、女性たちの声として、例えば、やさしい日本語による防災ワークショップでは、「地域の防災訓練のポスターや避難所での掲示物をやさしい日本語に変えたい」という声も上がった。

### 今後の展望

国際結婚移住者に加え、技能実習などで移住労働者は急増している。しかし彼女・彼らは、現在も次のような困難な状況に置かれている。「福島第一原発の事故収束はまだしていないこと」「全国で外国人住民290万人となる現在でも、福島県内の外国人数は1万5,500人の外国人散在地域であり、外国人支援の社会的資源が限られていること」「昨年の台風による水害や今回の新型コロナウイルス猛威によって、県内の自治体には新たな外国人住民政策を打ち出す余力がないこと」。

9年前の「未曾有の大災害」の教訓が忘れ去られつつあった中で、新型コロナウイルスという「未曾有の世界的危機」を迎えた。そのような中であっても、福島の移住女性たちは、「カラフル（多文化）社会」を目指しつづける。そして私たちも、彼女たちとの協働を続けていきたい。

### 今こんなことやってます

- 「ふくしま My Story」記録化  
母国から遠く離れた福島を「home」として暮らしてきた移住女性たち6人からの聞き取りをし、①生い立ち、②来日経緯、③現在までの暮らし、④大震災の経験に沿ってまとめた。2016年に日本語版（64ページ）、2017年に英語版を発行。在庫わずか。
- 日本語教室（参加費無料）
  - 福島サロン（EIWAN 活動スペースにて）  
木曜クラス：毎週木曜／10～12時  
土曜クラス：月2回土曜／10～12時
  - ほうらい子ども日本語教室（同上場所）  
毎週金曜日／15～19時／小1～高3
  - 白河サロン（マイタウン白河にて）  
月2回日曜／14～16時
- 継承語教室（各月2回）
  - 須賀川市：主催 つばさ～日中ハーフ支援会
  - いわき市：主催 福島多文化団体～心ノ橋
  - 郡山市：主催 日中文化ふれあいの会～幸福

### DATA

- 代 表：佐藤信行
- 設 立：2012年7月
- 住 所：〒960-8055  
福島市野田町2-3-2 神野ビル3F 東
- TEL : 080-8215-1556
- E-mail : eiwan311@gmail.com
- H P : <http://gaikikyo.jp/shinsai/eiwan>